演新聞
昭和30年３月29日 第３種郵便物認可
宮崎発夢未来～ときめきと学びを世界中に
日本講演新聞
2025年（令和７年）
6/23 月
3076号
発行 ㈱宮崎中央新聞社

「敬護」――人生の大先輩を敬い護る

「ハッピーリタイアメント社会」へ

リハプライム株式会社
代表取締役
小池 修

【こいけ おさむ】1965年埼玉県生まれ。早稲田大学法学部卒。リハプライム株式会社は第13回『日本でいちばん大切にしたい会社』大賞・「厚生労働大臣賞」、第57回『グッドカンパニー大賞』などを受賞。『日経スペシャル カンブリア宮殿』（テレビ東京）にて特集された。著書に『母ちゃん、ありがとう 親の介護、後悔しないためにできるたった一つのこと』（ＰＨＰ研究所）、『日本一社員が辞めない会社』（ぱる出版）がある。

●「敬護」の理念を胸に

私たち「リハプライム株式会社」は、リハビリ型のデイサービスと訪問看護を中心に、様々な事業を展開しています。後ほどご紹介しますが、例えば、喫茶店や美容室の経営なども行っています。

そのため、「なんで介護と関係のないことをやっているの」と言われることもあるのですが、それぞれの事業の根底にあるものは一貫しています。それは、人生の大先輩を敬って護る「敬護（けいご）」の理念です。

◆

「敬護」は、事業立ち上げの際、すでに念頭にあった考え方でした。

私はもともと介護業界と縁があったわけではなく、以前は上場企業のフィットネスクラブで役員として勤めていました。

人生の転機が訪れたのは２０１１年のことです。両親が同時期に倒れてしまい、介護の必要が生じたのです。私は、働きながら両親をサポートできるよう、日中に父母が通える施設をいくつも見て回りました。

その結果、とても驚いたのです。

介護の現場では、利用者の方々が「よっちゃん」「しずちゃん」というように、ちゃん付けで呼ばれていました。歩行を介助されるときには「おいっちに、おいっちに」と幼児のように声をかけられていました。

私の目には、お年寄りの方々が子ども扱いされているように見えたのです。

私の父は厳格な人柄でした。高齢になってからも、私がつじつまの合わないことを言うと、「さっき言ったことと違わないか」と鋭く指摘することもありました。

そんな父が施設で子ども扱いされたら、とてもその場にはいられないだろうし、私自身もそれは嫌だなと思ったんです。

私は、自分の父や母が、目上の人として接してもらえる介護施設を求めていました。しかし、納得できる施設は見つけられませんでした。

そこで私は、自分でリハビリ型のデイサービス施設を立ち上げることを決意しました。

ところが、早速、開業資金の問題に直面します。銀行からは十分な融資を受けられないことが判明したのです。

「諦めるべきかな」という考えが頭をよぎりました。でも、父母の顔を見ると「もしこのまま両親が亡くなってしまったら、絶対に後悔する」と思ったんです。

そこで、当時45歳だった私は建てたばかりの家を売却し、足りない資金を調達しました。そしてそれを元手に２０１１年、リハビリデ

イサービス施設の「コンパス」(後の「コンパスウォーク」)1号店をオープンしました。

開業した当初は苦しい日々が続きました。しかし、それもなんとか乗り越え、今ではフランチャイズ(※)で施設は全国に広がり、「コンパス」関連拠点の数は200を超えています。

父は施設がオープンしてしばらくすると亡くなってしまいましたが、私の作ったデイサービスに通ってもらえて、本当に嬉しかったです。母は今も利用してくれていて、この会社を応援してくれています。

◆　◆

私は、上場企業の役職を投げうって、家を手放し、借金も背負って「コンパス」をスタートしました。そこまでした理由はたった一つです。自分の親を敬い、大事にする施設をつくるためです。

この思いを「敬護」という言葉で表現したのです。要するに、介助して護る「介護」ではなくて、今日の日本を築いてくれた「人生の大先輩」を敬って護るということです。

最近は利用者の方の「心の若さ」も重要なテーマになっています。

いくらリハビリ専門のスタッフが、「ふだんの生活で元気に動けるように」とサポートしても、ご本人が「俺なんか、どうせもう駄目だからさ」という心境だと、なかなか効果は上がりません。

そこで私たちは、利用者の皆さんに「孫と一緒に京都に行こう」とか「夜の横浜を夫婦で歩こう」といった目標を考えていただいています。すると、気持ちが若返ってリハビリの効果も違ってくるのです。

これまでの介護施設は、「子どもの都合に合わせてお父さん、お母さんを預ける場所」というイメージが強かったと思います。

一方で、私たちは、利用者の方々が最後の最後まで活力を持って、自分らしく生きるお手伝いをしたいのです。

●「訪問型」のサービス

私たちは、宿泊型の介護施設は設けていません。そうした施設が悪いわけではないのですが、私は高齢の方々が「住み慣れた地域社会で暮らし続ける」という選択肢を持てることが重要だと考えています。

そのため、介助を必要とする高齢の方々が、たとえ一人でも家で過ごせるように、私たちは「訪問型」に絞って、様々なサービスを展開してきました。

これにより私の母は、一日中、家に一人でいても無事に過ごせるようになりました。

日中は施設でリハビリをして、母が家に帰ると、訪問看護ステーションの看護師さんに体のチェックをしてもらいます。その他の時間は、「定期巡回サービス」を利用します。介護スタッフが定期的に自宅を巡回して安否確認や見守り、健康チェックを行うのです。

さらに、私たちが独自に考案した「娘息子代行サービス」も利用しています。これはシニア向けの何でも屋さんのようなサービスです。

スタッフは、危険なことや専門性の高い仕事はしませんが、例えば、ちょっとした家具の移動や布団干しなどを行います。つまり、介護サービス範囲外の「娘や息子に頼むような簡単なお手伝い」をするのです。ふだんデイサービスなどで顔を知っているスタッフが行うので、利用者の方々は安心してお願いできるという利点があります。

母の場合、家の中で助けが必要なタイミングが分かっているので、それに合わせて「娘息子代行サービス」の担当者が定期的に来てくれています。

サラリーマン時代、私が母に会えるのは年に1、2回だけでした。そう考えると、施設ではなく家に母がいてくれて、毎日顔を見られることは、とても貴重だなと感じています。(2面に続く)

※本社の仕組みやノウハウを基に出店すること。

日本講演新聞からのお知らせ

もしも新聞が雨にぬれていたら……

お手元に届いた新聞が、濡れたり汚れたりしていたら、再送いたします。
お気軽にお知らせください。

TEL:0985-53-2600
FAX:0985-53-5800
MAIL:info@miya-chu.jp
お問い合わせフォーム➡

社説下の「問いかけ」をご覧ください！

皆さんの考え方や経験を問う質問を提示しています。職場の研修や家族・友人とのコミュニケーションの一環として、回答を共有してみてください！

１面から続く

「ハッピーリタイアメント社会」へ

日本中に「コンパスヴィレッジ」を

リハプライム株式会社
代表取締役
小池 修
Koike Osamu

●美容室も移動販売も

私たちは埼玉県さいたま市で「茶の間」というシニア向けの複合施設の運営も行っています。

喫茶スペースがあり、奥は美容室になっています。この美容室には、移動式のシャンプー台が備えられていて、利用者はカットやシャンプーの際に席を移動する必要がありません。

また、交流型デイサービス「コンパスフルネス」もここで実施しています。高齢の方々が集まって、健康マージャンや塗り絵、音楽会などの趣味を楽しまれています。

私たちは他にも、地域のいわゆる「お買い物難民」に向けて、日用品や食料品の移動販売なども行っています。

私の母は80歳を過ぎた今でも、会って話したい人がいます。オシャレにだって気を配ります。買い物も、誰かに頼むだけでなく、自分の目で見て選びたいんです。

「茶の間」の外観と施設内の美容室

「茶の間」などのサービスで、そうした希望が実現できていると、母はイキイキしていて、元気なのですね。

それが、私たちが様々なサービスで目指している姿です。高齢の方々がそれまでに暮らしてきた地域社会で、活力を持って生きていける。そのための地域包括システムを築いていきたいと考えています。これを私たちは「コンパスヴィレッジ構想」と呼んでいます。

現在はまだ、それぞれのサービスが利用可能なエリアが限られているので、この仕組みを全国に広めることが今の私の目標です。

●親の一番喜ぶことは？

ここまで「親のために」「人生の大先輩のために」と語ってきました。少し立ち止まって考えてもらいたいのですが、そもそも親が一番嬉しいこととは、いったい何だと思いますか？

私がこれを学んだのは、母のある一言からでした。

「コンパス」の拠点は毎月のように増えていますから、私は「おめでとうございます」と言いに全国を回ります。

そのため母に頻繁に「施設がオープンするから行ってくるよ」と声をかけます。すると母は必ず「大丈夫なのか？」と言います。「事業が失敗するのでは」と心配しているのです。

ある日、いつもと同じように、私は母に「大阪に拠点ができるよ」と伝えました。ただいつもと違って、施設をオープンしてくださるのが、私が尊敬している方だったんです。私は興奮しつつ母に話しました。

「今度施設を開設してくれるのは、すごい人なんだ。こんな人と出会えるなんて、本当にこの仕事をやっていてよかったよ」

すると、もう何年も同じだったセリフが、初めて変わったんです。母は「よかったね」と言ってくれました。

私の「本当に嬉しい」という気持ちを母は感じ取ったんですね。

２人の娘の親である私も、母と同じような経験をしました。

当時中学生だった次女が、私の部屋に入ってきて「お父さん、漢検６級受かった！」と話しかけてきたことがあります。我が家では娘がテストで１００点を取ると、一緒に記念写真を撮る習慣がありました。そこで、その日も一緒に写真に写りました。

その写真を見てみると、娘が満面に笑みを浮かべていて、それが私にはとても嬉しかったんです。

漢検６級合格は、一般的にはそれほど大きな成果ではないでしょう。でも、子どもがやりがいを持って努力し、幸せそうに笑っている。それが、親にとっては何より嬉しいことなのだと、私は確信しました。

「人生の大先輩への敬護」、その本質とは？

つまり、自分の親にしても、他人の親にしても「人生の大先輩」を大切にする「敬護」の本質とは、「サービスを提供している人自身が、イキイキと働き、幸せであること」でもあるのです。

だから「敬護」を掲げる会社として、社員自身が、笑顔でやりがいを持って過ごせる環境を作らなければならないと考えました。

社員が「自分の人生を犠牲にして利用者さんのために働く」という状況ではいけないのです。

私は、職場の環境を改善するために積極的に人員を増やしたり、やりがいを持てるような評価制度や研修に力を入れたりしてきました。

その結果、社員の離職が目に見えて少なくなり、「離職率が高い」と言われる介護業界で、私たちの会社では社員の定着率が9割を超えるようになりました。

「恩返し父母研修」にて

●社員の「イキイキ」の条件

社員のやりがいのために何より重要なのが経営理念です。これは、いわば会社が目指すゴールです。

理念がしっかり定まっていないと、社員は主体的にイキイキと仕事をすることができません。自分で考えて行動するにも、どこに向かって努力すればよいか分からないからです。

また、経営理念は決めるだけでなく、事あるごとに社内で確認し、浸透させることも大事です。そして何より、社長自らが自身の行動で、その理念を体現しなければなりません。

次に、働く環境の改善について一例をお話しすると、私は「社員がいつでも休める環境」が重要だと考えています。

「親が入院する」などの緊急事態のときに、誰かにお世話を頼んで、自分は仕事をせざるを得ないようでは、良い職場環境だとはいえません。

私は積極的に人員を増やして、そうした状況を改善してきました。

また、社員の皆さんには「自分の仕事のナンバー2を作る」ということを意識してもらっています。

要するに、「自分しかできない仕事」が生じないように、他のスタッフと業務について共有しておくのです。そして出勤できない時には、お互いに助け合います。

個々人がそれを意識し、会社もそれをサポートしています。

●恩返し父母研修

会社での取り組みの中で、特に評判がいいものの一つが「恩返し父母研修」です。

これは、入社して5年経った社員が、親を連れて勤務時間に高級ホテルに泊まりに行くという取り組みです。かかる費用は全額会社が負担します。

なぜこれを始めたのかというと、誰もが自分の家庭を持つと、親と旅行をしなくなるからです。

家族旅行の際、『親も一緒に連れていきたい』とパートナーに提案したら怒られた」という人もいました。

「それなら会社の研修ということにしよう。そうすれば誰も文句は言えないだろう」と考えたわけです。

研修ですから、旅行から帰ったらレポートは提出してもらいます。それを見ると、皆が喜んでくれているのが分かるのですね。

それに、ご両親からもメッセージをいただきます。「子どもが良い会社で働けている」と喜んでくださると、私はとても明るい気持ちになります。

このように「社員の幸福」を目指して、様々な取り組みを行ってきましたが、やむを得ない事情で社員から離職を切り出されることもあります。

「両親が倒れたので、介護のために離職して地元に帰ります」という場合もそうです。しかし、本来私たちの会社は、そうやって親を思う人たちのためにこそ存在するのです。

だから私は、そんな社員に「地元でリハプライムの子会社を作らないか？」と提案してきました。資金は会社が出資します。

こうして、長崎、和歌山、静岡、沖縄（石垣市）、群馬に拠点が広がりました。ある女性は、30歳で3店舗を構えて、年商は2億円に上りました。

彼らにも、地元で「コンパスヴィレッジ」を展開していってほしいと思っています。

◆

◆

私たちはこれからも「敬護」の精神を基に、シニアの方が尊重され、活力を持って生きられる社会、「ハッピーリタイアメント社会」を目指します。そしてそのためにも、全社員の仕事の充実と幸せを追求していきます。

今日お話しした私たちの取り組みが、皆さんの参考になれば、私はとても嬉しいです。

（東京都で立川商工会議所サービス業部会が主催した講演会より／取材・惟住長秀関東特派員、編集・岩屋佳朗）